



Title	「国語科の基底構造部」考(六) 日本語の敬語にかかわる基底構造部の要素
Author(s)	山口, 康子
Citation	長崎大学教育学部教科教育学研究報告, 16, pp.一-五; 1991
Issue Date	1991-03-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/30140
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-23T12:58:56Z

「国語科の基底構造部」考 (六)

——日本語の敬語にかかわる基底構造部の要素——

国語科の授業を構築し有効な教育課程を構想することが、年々困難になりつつある。それは、児童・生徒の言語環境が複雑多岐にわたり、雑多な予測できない影響力を持つ放送言語に、学校教育よりも早く、ほとんど出生と同時に接触し、その後も恒常的に生活そのものとして、成長過程にないまぜになることに主として原因する。メディアの進展が余りにも急速であるため、学校教育課程の中で適確に対応することが不可能になっている。児童・生徒は、まず母語環境として日本語を使用する家族の中に生まれ落ち、長ずるにつれて地域社会に少しずつ活動範囲を拡げてゆき、基本的な言語能力を身につけて学校生活に入る。学校の国語科の授業はその上に重ねられる意図的訓練課程と考えられ、教材の種類や内容は時代に即応しつつも、教育課程の構想の面では長く安定を保ってきた。それがこのところ大幅にかつ根本的にゆらぎ、国語科の授業の構想を抜本的に見直す必要が生じている。

その事を痛感した昭和五十年代後半から、私は国語科の授業の再構築に必要な教育課程の構想を得るべく、国語科の授業内容を二重構造としてとらえ、その具体的な内容について個々の要素に

「国語科の基底構造部」考 (六)

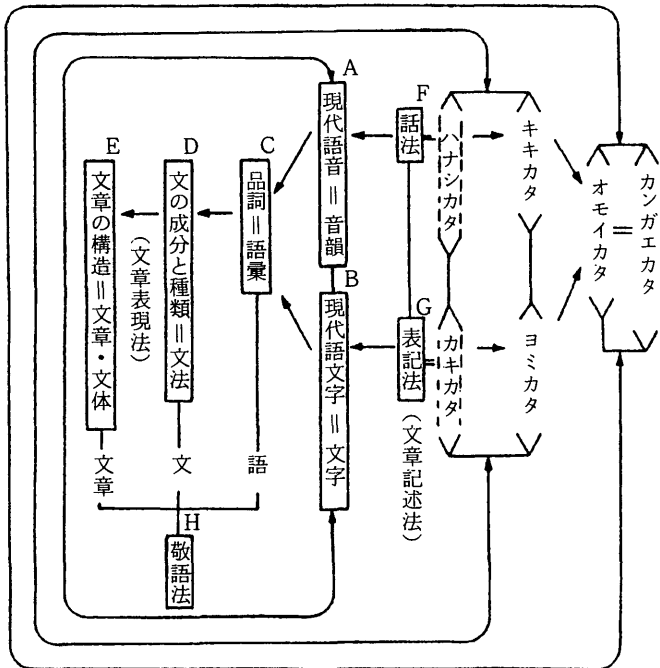


図1

山口康子

分析し、その各々について考察して、昭和五十八年以降「長崎大学教育学部教科教育学研究報告」に発表してきた^(註1)。これまでに分析を終えた要素は、音・文字・語彙・文法・文章文体の五要素であり、本稿はそれに続く最後の要素として敬語を取り扱う。

言語能力の各要素の相関構造を、私は前ページ図Ⅰのようにとらえ、表中の各要素を検討してきた。

二

日本語の敬語は語彙による表現にとどまらず、文法体系まで整って、文章・文体とも深くかかわっている。これは日本語の際立った特色の一つである。社会構造の変化と共に、近年敬語の体系にも大きなゆれが見られるようだが、敬語の性質が変化してゆくとしても敬語が不必要になることは考えられないし、現在、まだ敬語の使用の適不適が円滑な社会生活の鍵にさえなっているのが実状である。日本語を外国語として学ぶ留学生たちもつとも習得に苦しむのが敬語であり、留学生たちの素朴な疑問にさえ適確に答えられる日本人はむしろ少ない。大半の日本人には敬語についての自覚的な意識が欠落していると考えられる。又、一般に家族の人数が減少し、家庭内の人間関係が単純になって、敬語習得の環境はきわめて限定されてしまっている。こういう現状の中では、なおさら学校教育課程の中で敬語の体系の基本を取り扱うことは必要不可欠のことである。

社会生活の中で複雑な人間関係を生きてゆくようになって、はじめて敬語はその必要性を生じる。学校教育の中にいる間、児童・生徒の人間関係はなお単純で、複雑な人間関係に対応する敬語を十分に理解することはかなり困難であろう。敬語の教育は社会自

体が強い教育力を持つていることが必須なのである。学校教育の中では、敬語の基礎となる体系の認識を確立することを目指し、実際の表現の場で様々な性格の敬語を組み合わせて使用することができるような言語感覚を育成することが肝要であろう。

そのためには、普通に敬語と称している概念の輪郭を明確にしておかなければならない。いわゆる敬語は、話し手が聞き手や話題の人物・事柄を自分よりも上のものとして表現する言い方であり、尊敬表現と換言できるが、これは、話し手・聞き手・話題の素材の三者の関係によつて決定される言語形式の一つにすぎない。すなわち話し手が聞き手や話題を自分を軸にしてどのように位置づけて表現するかという待遇の問題で、敬語は待遇表現として体系的にとらえなければ、正しい理解に達することはできない。日本語においては尊敬表現が他の待遇表現に比して極端に発達しているため、一般に敬語だけが意識にのぼり、体系的な把握を困難にし、待遇の表現という本質から遠ざけていると考えられる。

待遇表現の認識の徹底は、国語科教育の基底構造部において果たすべき重要な目標の一つであると考えられる。以下、そこにおくべき具体的な基本項目を挙げる。

三

国語科の基底構造部におくべき「敬語」関係の要素を列記する。本稿に先立つ拙稿と同じく、当該項目の学年配当や具体的な教材・文例などは別個の問題としてここでは取り扱わない。義務教育課程の中で習得することがのぞましい要素を整理・提示し、概説する。

I、敬語の本質

1、待遇表現の定義—いわゆる敬語の本質は、話し手が聞き手や話題の素材をどう待遇するかという、待遇意識にかかわる言語表現であり、話し手・聞き手・話題の人物や事柄の三者の間の尊卑・優劣・利害・親疎の關係にに応じて変化する表現であることを理解する。

2、待遇表現の種類—基本的には次の三種である。

- (1) 尊敬表現—話し手が自分より上位として待遇する表現。
 - (2) 対等表現—話し手が自分と同等として扱う表現。
 - (3) 軽卑表現—話し手が自分より下位として遇する表現。
- (1)がいわゆる敬語であり、(2)が敬意を含まない通常の表現、(3)はいわゆる卑語である。卑語は体系化できるほどには発達していない。現実には、特別の話題を持たない通常の表現である対等表現によつて下位としての待遇意識が表現されることも多い。従つて三種を体系的に意識することは困難ではあるが、それだからこそ重要でもある。

II、尊敬表現の体系

1、尊敬表現の種類—普通に次の四類に分けられる

- (1) 尊敬語
(2) 謙讓語 } 話し手が話題の人物・事柄を上位に待遇する表現
 - (3) 丁寧語 (丁寧語) —話し手が聞き手を上位に待遇する表現
 - (4) 美化語—話し手が自己の言語表現の品位を保つための表現
- 2、尊敬表現の形式
- (1) 尊敬語の形式
- (a) 人称代名詞を用いる。—あなた・あのかた・どちら……
 - (b) 接頭語を用いる。—お・ご・おん・み・貴・芳……

(c) 接尾語を用いる。—さん・様・氏・殿・君……

(d) 敬語動詞 (交替形式・置きかえ語とも) を用いる。

—あがる (食べる) おっしゃる (言う) いらつしやる (行く・来る・いる) なさる (する) ……

(e) 尊敬の助動詞を用いる。—れる・られる・たまえ……

(f) 「おーになる」「おーなさる」「おーあそばす」「おーくださる」の—の部分に動詞の連用形・動작성漢語を挿む形式を用いる。おはごになる場合もある。

—お書きになる・ご出席なさる・ご覧くださる……
(g) 動詞の連用形に「—てくださる」「—なさる」をつける。

—送ってくださいる・送りなさい……

(2) 謙讓語の形式

(a) 人称代名詞を用いる。—わたくし・ぼく・小生……

(b) 接頭語を用いる。—お・ご・愚・拙・弊……

(c) 接尾語を用いる。—儀・こと・ども……

(d) 謙讓の意を含む動詞 (交替形式・置きかえ語とも) を用いる。—おめにかかる (会う) 申す (言う) 存じる (思う) うかがう (行く・聞く・尋ねる・訪問する) ……

(e) 「おーする」「おー申し上げる」「おー申す」「おーにあずかる」「おーいただく」「おーねがう」「おーいたす」の—の部分に、相手に関わりを持たせる動詞の連用形・動작성の漢語を挿む形式を用いる。おはごになる場合もある。

—お話しする・ご招待にあずかる・お教えいただく……

(f) 動詞の下に「ーてさしあげる」「ーていただく」「ーあげる」「ー(さ)せていただく」をつける。

—説明してさしあげる・説明していただく……

(3) 丁寧語の形式

(a) 丁寧の助動詞「ます」「です」を用いる。ー行きます……
 (b) 動詞の連用形に「ております」「てまいります」をつける。「ーております」は相手側の行為には用いない。

(c) 名詞、形容動詞の語幹に「であります」をつける。

(3) 丁寧語—話題の物事の表現を通して話し手がより強く聞き手に敬意を示す表現であるとして、丁寧語と区別して考える場合がある。

(a) 人称代名詞を用いる。ーわたくし・小生

(b) 接頭語を用いる。ー拙・弊・愚……

(c) 丁寧の動詞を用いる。ーいたす(する)まいる(行く)……

(d) 「おーいたし(ます)」「おー申し(ます)」「おー申しあげ(ます)」のーの部分に相手に関わりを持たせる動詞の連用形・動作性の漢語を挿む。

—お教えいたします・ご協力申し上げます……

丁寧語に属する表現は謙讓語と重なり合うものが多いが、現代社会が上下の身分関係に支配されるタテ社会から共同生活を重んずるヨコ社会に変化する時代の流れの中では、自己を低める謙讓語が相手との関係を重んじる丁寧表現に変化することはむしろ当然といえよう。しかし、この点が現実の問題として、現代の敬語を分かりにくくしているのもまた事実であろう。

(4) 美化語の形式

(a) 上品な言い方の動詞・名詞を用いる。食べる(いただく)……

(b) 接頭語(お・ご)をつける。ーお酒・ご飯……

五

以上、国語科の基底構造部のうち、敬語にかかわる事項を列挙した。現実の待遇表現の場は、話し手の意識に基づき状況に応じて複雑に変化し、何種類かの待遇語が組み合わされて用いられる。例えば、「私は明日お伺いいたします」という表現は前項の番号・符号でいえば、(2a)―(2d)―(2e)という組み合わせの謙讓表現である。教育の場においては、個々の要素の理解よりも、組み合わせの実態に配慮しつつ指導してゆくことが大切である。

昭和五十八年以降分析してきた「国語科の基底構造部」の要素に関する考察は、一まず本稿をもつて終結する。国語科の授業の有機的な構造の樹立を目指す、より大きな構想の一部である。長期間にわたって部分的な発表を重ね、やむを得ぬ重複部分もあることゆえ、全体をまとめる機会を得たいものである。大方のご批判をお願いする。

注

- 1、この問題に関する拙稿は以下のとおりである。
 - (1) 拙稿(1)「国語の授業」管見―国語科では何を教えるべきなのか―〔長崎大学教育学部教科教育研究報告〕第六号、昭五八・三三
 - (2) 拙稿(2)「国語科の二重構造化」試論―特に基底構造部について―〔長崎大学教育学部教科教育研究報告〕第七号、昭五九・三三

- (3) 拙稿(3)『国語科の基底構造部』考(一)―日本語の音にかかわる基底構造部の要素―(「長崎大学教育学部教科教育研究報告」第八号、昭六〇・三)
 - (4) 拙稿(4)『国語科の基底構造部』考(二)―日本語の文字にかかわる基底構造部の要素―(「長崎大学教育学部教科教育研究報告」第九号、昭六一・三)
 - (5) 拙稿(5)『国語科の基底構造部』考(三)―日本語の語彙にかかわる基底構造部の要素―(「長崎大学教育学部教科教育研究報告」第一〇号、昭六二・三)
 - (6) 拙稿(6)『国語科の基底構造部』考(四)―日本語の文法にかかわる基底構造部の要素―(「長崎大学教育学部教科教育研究報告」第十一号、昭六三・三)
 - (7) 拙稿(7)『国語科の基底構造部』考(五)―日本語の文章・文体にかかわる基底構造部の要素―(「長崎大学教育学部教科教育研究報告」第十四号・平成二・三)
- 2、敬語に関する論考は、枚挙にいとまないが、『国語学大辞典』以下、ほぼ通念化した考え方である。
- 3、注1の拙稿(3)～(7)参照。